

学習におけるライバルの人物像についての基礎的検討¹⁾

太 田 伸 幸²⁾

問題と目的

学校生活において、生徒は、教師、友人といった他者との関わりあいを持ちながら学習活動を行なっている。この、学習活動という行為がなされるためには、生徒自身に何らかの動機づけがなされていなければならない。この動機づけを促進する要因として、生徒と関わりあいを持つ教師、友人の存在は無視すべきものではない。このうち教師は教える立場から影響を与える存在であり、生徒と同じように学校で学習しているわけではない。それに対して友人は生徒と同じことを学習している仲間である。太田(1995)は生徒の学習意欲に対する友人からの影響に注目した調査を実施し、友人からの同じ働きかけが、場合により生徒の動機づけを促進したり阻害したりすることを示した。

このように生徒は、学習を行なう上で周囲の生徒から影響を受けている。その影響は、生徒の他者と関わりあいを持ちたいという意識が大きければ大きい程強くなると考えられる。この、相手との関わりあいを持ちたいといった意識は、周囲の生徒との協同・競争意識を生むのではないだろうか。そして、特に生徒の競争意識に影響を与える存在としては、友人だけでなくライバルという存在も注目されるだろう。

この“ライバル”という表現は、スポーツやゲームなどの競技、あるいは学校や会社などの社会的な場面で同じ目標に向かって努力している人たちを指してよく用いられる。学習場面においても、生徒は他の生徒とテストの点数を競うといったことはよくあることであり、この点数を比べる相手のことをライバルと認知していることもあるだろう。

しかし、先行研究において、学習上のライバルについ

での考察はほとんど見られない。これは教育現場において、競争という状況が回避されがちであり、ライバルはその競争自体を促進する要因だと考えられているためであると考えられる。Deutsch(1993)は学校での学習において、協同学習についての研究は多く行なわれているが、競争学習や個人志向的な学習に関してはあまり関心が向けられていないことを指摘している。さらに、学習において競争は、協同や個人志向と互いに関連を持ちあわせているのに、学校では競争者としての有効な方略を教えていないことも示唆している。吉田・山下(1987)の学習意欲に影響を及ぼす要因についての調査において、学習理由として友人やライバルとの競争意識をあげた項目が、中学生になって初めて現われたことが報告されている。これは、学習に対する意識が高まるにつれて、共学習者である、友人や同級生の成績にも関心が向けられるようになったことの現われだととらえることができるだろう。ライバルを含めた友人や同級生との競争は現実として存在し、生徒の学習活動に対して影響を及ぼしているのではないかと考えられる。そうであるなら、ライバルという存在についての分析を通して、生徒の学習行動、学習に対する意識に対して何らかの知見が得られるのではないだろうか。

学習場面に限らないライバルに関して、室山(1995)がライバルをどのようにとらえているかについて面接を実施し検討を行なっている。この面接によって得られた記述を基に数量化Ⅲ類による分析を実施し、3次元を抽出した。その次元とは、①“対等競争—非対等競争”の軸、②“双方向的競争意識—一方向的競争意識”の軸、③“勝ち負け重視—人物重視”の軸、の3つである。この結果に基づいて室山(1995)は、ライバルを「課題を媒介として競争する相手で、実力が同程度であり、競争によってお互いに良い影響を及ぼしあう相手」として定義した。各次元についてこの定義によるライバルに照らしあわせてみると、①では対等競争、②では双方向的競争意識、③では人物重視があてはまると考えられる。しかし次元として軸が存在する以上、定義とは逆方向に影

1) 本研究の一部は日本グループ・ダイナミックス学会第46回大会において発表された。

2) 名古屋大学大学院教育学研究科教育心理学専攻博士課程(後期課程)

響を与える記述も存在している。②の一方的競争意識にあてはまるようなライバル認知では、ライバル意識の方向は確実に一方的であり、室山の定義にあるような「お互いに良い影響を及ぼしあう」ということは考えにくい。そこで本研究では、ライバルを「課題を媒介とした競争相手で、相手の存在や言動が、自分の学習態度または学習成績に対して良い影響をもたらしていると認知している相手」として定義する。ただし、ここでいう競争とは、お互いが競いあうといった本来の意味での競争を指すだけでなく、学習を行なう上での目標や、自分の能力を測るための基準として相手を意識した場合での学習行動も含めることとする。

さて、ライバルとの競争は課題を媒介とした相互作用の過程であるとも言えることができるだろう。では、この相互作用を引き起こすプロセスはどうなっているのだろうか。人は、自己の意見や行動の妥当性を高め、所属する社会や集団での自分の置かれた状態・環境を良く知るために、さまざまな他者との比較を行なっている。Festinger (1954) は、人間には自分の意見や能力を評価しようとする動機づけがある、ということを主張した。これは社会的比較理論の仮定の1つである。またFestingerは、評価のための客観的基準が使えない時は自分の意見や能力を他者と比較する、すなわち自己評価することが社会的比較の働きの中心である、としている。

また、比較の対象となるのは類似した他者が多い。これは自分と類似した他者の方が明瞭で安定した自己評価が獲得できるからである。高田 (1981) はこの「類似した他者」というときの類似性の定義があいまいであることを指摘し、この類似性には類同性を前提とした一致性を含意しているのではないかと、としている。類同性が高い人とは、自己の物理的に所属する集団や周囲にいる人を指す。すなわち、自分と能力が類似している他者であっても、自分と同じ集団、状況に置かれていることが必要であり、類同性が低ければ比較が行なわれ得ないとしている。この指摘からも、生徒が社会的比較の対象を身近な生徒に求めるということは説明されるだろう。

そして、こういった社会的比較がいつ頃から行われるようになるかについては、France-Kaatrude & Smith (1985) が、自分と能力差のある他者よりも自分と同じくらいの能力を持つ他者との比較が、児童においても有意に多く行なわれることを明らかにしている。またFrey & Ruble (1985) は、幼稚園児から小学校4年生までの児童に対して会的比較の内容について面接調査を行なった結果、学年が上がるにつれ、相手の個性に対する興味から課題の遂行に対する興味へと移行することを示している。児童期からすでにこうした社会的比較が行

なわれていることがうかがえる。

Latané (1966) は、社会的比較の自己評価以外の機能として自己高揚の機能をあげた。能力の比較においては、他人より優れているのが良いとする向上性の圧力が、比較を行なっている本人に働くため、比較の対象としては自分より少し優れた他者が選ばれやすい。この場合の比較では、比較の行為者のみはその比較を行なうことに意味を持っており、相手を自分の努力目標として認知していると考えられる。また類似した他者との比較において、比較の行為者が両者である場合にこの向上性の圧力が働くと、相手より少し優れた状況に向かってお互いが努力する結果となる。相手より上にいくことが目標となり、この意識が競争を引き起こすと推測される (FIGURE 1)。そして、“相手に負けたくない” といったお互いに対するライバル意識が形成されるのであろう。

競争関係にある2者を表現するのに、“ライバル” は確かに有効な用語として用いることができる。しかし、それはあくまでも客観的評価としてのライバルであり、本人が実際に相手をライバルとして認知しているかは本人にしかわからないのである。どういう人物がライバルであるか、ということは誰かに教わるわけではなく、誰もが自然と自分の中にライバルというものに対する概念を内在化させていく。その内在化されたライバルに対する概念に、個人差が生じるのは避けられないことなのである。個人差があるからこそ、室山 (1995) はライバルのとらえ方の次元の抽出を行ない得たともいえるだろう。逆に言えば、この次元の抽出により、どういう人物をライバルとして認知するか、また、なぜその人物をライバルとして認知するようになったのかについて個人差が存在することが明らかにされたとも考えられる。

こういった個人差を考える上で、ライバルとはどのような存在なのかを明らかにすることが必要であろう。また、実際にライバルを持つに至った生徒とライバルを持

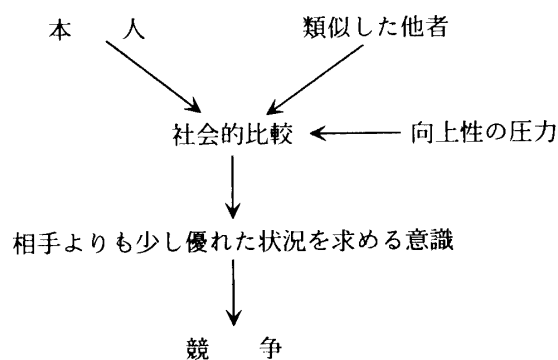


FIGURE 1 社会的比較からの競争までのプロセス

たない生徒の間にもライバルに対する認識の差があることも考えられるため、ライバルを持たない生徒はどういった存在をライバルとして考えているのかについても検討することも必要となるであろう。

本研究は、学習場面におけるライバルの人物像を、実際にライバルを持つ生徒のライバル像と持たない生徒のライバルに対する認識についての比較と、ライバルと友人の比較を通して明らかにすることを目的とする。

調査 1

【目的】

ライバルが存在する生徒のライバルの人物像と、存在しない生徒のライバルに対する認識の比較を通して実際のライバル像について検討することを目的とする。

【方法】

調査対象 名古屋市内の普通科公立高等学校 2 年生 295 名 (男子 150 名, 女子 145 名) を調査対象にした。

調査時期 1998 年 6 月下旬, LHR の時間に担任教師により各クラスごと集団実施された。実施時間はおよそ 15 分程度であった。

調査紙 ライバルとの関係・人物像に関する項目を、太田 (1996) の研究で用いられたライバルの人物像、ライバルとの関係をたずねる質問項目を参考にして作成した。項目は 14 項目からなる。太田の質問項目では、2 つの記述のうち、よりあてはまる方を選ぶ二者択一方式で

あったが、それらの記述対は 1 次元的な尺度とはなっていないかった。そのため、質問項目を作成するにあたり、各質問項目に対して個別に対応した評定尺度を与え、もっともあてはまるものを選ぶ方式に改めた。よって本調査では、項目によって適切な評定尺度の段階が異なるため、4 件法または 5 件法で回答を求めている。

手続き フェイスシートにおいて、性別、ライバルの有無、ライバルの性別・学年についての回答を求めた。ここでライバルが存在する・存在したと回答した生徒はその人物について、存在しないと回答した生徒についてはどんな人物がライバルとなり得るかについて、質問紙に回答するよう質問文中にて教示した。

【結果と考察】

TABLE 1 に示したように、ライバルが存在する・存在した生徒は、290 名中 152 名 (内, 存在した生徒 47 名) であった。ほぼ半数の生徒がライバルを持ったことがあると回答していた。また、ライバルが存在すると回答した生徒に対して、そのライバルの性別と学年について回答を求めたところ、ほぼ同性同学年 (TABLE 2, 3) となっており、太田 (1996) の結果を支持した。

「相手もライバルと思っていますか」の項目 (“自分だけがライバルと思っている”・“たぶん自分だけがライバルと思っている”・“たぶん相手もライバルと思っている”・“相手もライバルと思っている”の 4 件法) において、(自分だけがライバルと思っている)・(たぶ

TABLE 1 ライバルの有無 N = 288

	ライバルが存在する	ライバルが存在しない	以前はいたが現在はいない
男子	51	72	21
女子	54	64	26

TABLE 2 ライバルの性別 N = 105

	ライバル		
	男子	女子	不明
生徒			
男子	49	2	0
女子	1	51	2

TABLE 3 ライバルの学年 N = 105

	1 年生	2 年生	3 年生	その他
男子	1	47	0	3
女子	0	52	1	1

「その他」としてあげられた関係は中 3, 大学生, 兄弟であった。

学習におけるライバルの人物像についての基礎的検討

ん自分だけがライバルと思っている)を一方的ライバル認知、(たぶん相手もライバルと思っている)・(相手もライバルと思っている)を双方向的ライバル認知とした。ライバルが存在する・した生徒では、一方向的ライバル認知を持っていたのは86名であり、双方向的ライバル認知を持っていたのは66名であった。また、「ライバルを目標として考えていますか」(“自分が相手を目標としている”・“相手が自分を目標としている”・“お互いを目標としている”・“考えていない：__と知っている”の4件法)の項目との度数分布をTABLE 4に示した。

室山の定義では、ライバルとの関係は“お互いに良い影響を及ぼしあっている”となっており、ライバルとしてよりあてはまっていると考えられる関係では、お互いにライバルとして認知していることを示唆していた。しかし、双方向的なライバル関係を築いていたのはライバルがいる生徒の半数にも満たなかった。ただし、双方向的なライバル関係を築いている生徒は、ライバルとの成績の差をそれほど大きく感じておらず、「成績の差」の項目に対する回答の分布は、双方向的なライバル認知を持っている生徒では同程度を中心としている。それに対して、一方向的なライバル認知を持っている生徒の場合には、

「やや相手が上」、「相手が上」に集中している。このことから、一方向的なライバル認知の場合には自分より成績が下の生徒をライバルとしてあまり認知しないことが推測できる。一方向的なライバル認知を持つ際には、相手を自分の目標とする意識作用が強く働いているため、双方向的なライバル認知に比べ、競争の勝ち負けよりも“ライバルが存在する”ことの方が重要となり、自分の学習意欲を高める方向に作用していると考えられるのではないだろうか。このことは、一方向的ライバル認知において、自分が相手を目標として認知している生徒が半数以上を占めたことから支持されるであろう。一方、双方向的なライバル認知では、お互いを目標として認知している生徒の割合が最も多かった。これは、成績が同じ位の生徒にFIGURE 1に示したプロセスが生じたためではないだろうか。すなわち、お互いに相手を目標とすることにより競争が生じたためであろう。

次に、ライバルの有無によるライバルに対する認識の差を調べる目的で、ライバルの有無によるt-検定を行った。この分析においては、ライバルが存在する生徒をライバル存在群、ライバルが存在しない生徒とライバルが存在した生徒をまとめてライバル不在群として扱か

TABLE 4 目標の方向とライバル認知の方向性

	目 標 の 方 向			
	相手が目標	自分が目標	お互いに目標	考えていない, その他
ライバル認知の方向性				
一 方 的	56	0	6	23
双 方 向 的	18	4	27	17

TABLE 5 ライバルの人物像, 感情の項目のt-検定結果

	ライバル存在群	ライバル不在群	t-値
自分とライバルの成績の差はどれくらいですか	3.53 (1.12)	3.43 (0.98)	.85
ライバルとは学校内での付き合いはありますか	4.45 (0.95)	4.03 (1.25)	3.20 **
ライバルとは学校外でも付き合いはありますか	3.36 (1.37)	3.38 (1.44)	-.13
ライバルと学校内では行動を共にしていますか	3.52 (1.39)	3.50 (1.25)	.10
ライバルとは仲が良いですか	4.53 (0.77)	3.95 (1.07)	5.10 ***
ライバルとは勉強以外のことについても競争しますか	2.43 (1.21)	2.58 (1.27)	-.96
相手も自分をライバルと思っていますか	1.43 (0.50)	1.43 (0.50)	.13
相手がいるおかげで良い結果が出せると思っていますか	3.53 (1.15)	3.55 (1.20)	-.09
相手にだけは負けたくないと思いませんか	3.92 (1.09)	3.58 (1.13)	2.47 *
相手に追いつきたいと思いませんか	4.11 (1.18)	3.97 (1.13)	1.05
お互いに刺激しあっていると思いませんか	3.08 (1.26)	3.27 (1.20)	-1.25
相手に負けると悔しいですか	4.19 (0.96)	3.82 (1.12)	3.03 **
ライバル関係を強く意識していますか	2.79 (1.26)	2.51 (1.26)	1.87*

* $p < .10$ ** $p < .05$ *** $p < .01$ **** $p < .001$

うこととした。「ライバルとは学校内での付き合いはありますか」($p < .002$)「ライバルと仲は良いですか」($p < .0003$)、「相手にだけは負けたくないですか」($p < .012$)、「相手に負けると悔しいですか」($p < .033$)の各質問項目で有意差が、「相手に追いつきたいと思いますか」($p < .066$)、「お互いに刺激しあっていると思いますか」($p < .098$)の各質問項目で有意傾向が見られた。 t -検定の結果はTABLE 5に示した。

相手に追いつきたいであるとか、相手に負けると悔しいであるとかいった、ライバル意識に関する項目において有意差が認められた。相手との競争意識がはっきりと存在することを現わしている考えられる。しかし、これがライバルに対する敵対意識には結び付けられないであろう。「仲の良さ」の項目において、ライバルがいる生徒のほとんどがライバルと仲が良いと回答し、仲が悪いと回答した生徒は1人も存在しなかったからである。加えて、ライバルのいない生徒では大部分の生徒は仲が良いと回答していたが、仲が悪いと回答していた生徒も少なからず存在した。このことは、ライバルのいない生徒に“ライバル=敵対関係”という認知が存在することを示唆している。しかし、実際にはライバルのいる生徒のほとんどが、ライバルとは友好関係にあることが示されていた。加えて「ライバルとは学校内での付き合いはありますか」の項目においても、ライバルが存在する生徒の方がより付き合いがあるとしてした。ライバルと仲が良いということは、友人がライバルとして認知されているのであろうか。しかし、全ての生徒が友人をライバルとして認知することはありえないことであり、ライバルと友人についての比較を行なうことが必要であろう。

調査 2

【目的】

ライバルが存在する生徒のライバル像について明らかにするとともに、ライバルが存在しない生徒の友人像についても調査し、ライバルと友人の比較も行なうことを目的とする。

【方法】

調査対象 愛知県内の公立普通科高等学校 2 年生 393 名 (男子 242 名, 女子 151 名)

調査時期 1998 年 12 月上旬, 担任教師によりクラスごとに集団実施された。実施時間はおよそ 15 分程度であった。

調査紙 ライバルの有無に関する質問項目を設け、ライバルに関する情報、および友人に関する情報を得る項目とした。項目の内容は以下の通りである。

- ① 本人の成績
- ② ライバルの有無
- ③ ライバルの学年と性別
- ④ 競争の内容
- ⑤ ライバルとして意識し始めた時期
- ⑥ ライバルの成績
- ⑦ 友人の成績
- ⑧ 仲の良さ (4 項目)

ライバル存在群の生徒には①②③④⑤⑥⑧, ライバル不在群の生徒には①②⑦⑧について回答を求めた。①⑥⑦はそれぞれ 10 段階で評定を求め、②③は該当するものを選択させた。④⑤には記述で、⑧は「あてはまる (5)」～「あてはまらない (1)」の 5 件法で回答を求めた。ただし、この質問項目における本人およびライバル/友人の成績は、生徒が認知している成績であり、実際の成績とは異なっている。

手続き 調査 1 ではライバルがいない生徒に対して、ライバルとしてどのような人物が当てはまるかについて回答を求めたが、調査 2 では、ライバルが現在存在しない生徒 (ライバルが存在した生徒を含む) に関しては、同性同学年の友人を 1 人思い浮かべてもらい、その人物について評定をするよう、質問文中にて教示した。また、ライバルが現在存在する生徒にはその人物について回答を求めた。

【結果と考察】

調査 2 では、ライバルがいないの生徒には同性同学年の仲の良い友人について回答を求めた。したがって、以下の分析において、ライバルがいない生徒には、ライバルが過去にも現在もいない生徒と、以前はいたが現在はいない生徒が含まれる。なお、友人については、ライバルがいる生徒の回答は求めておらず、友人についての項目の分析は、ライバルがいない生徒のみの回答で行なわれている。

調査 2 でのライバルの有無は TABLE 6 に、ライバルの性別と学年は TABLE 7, 8 に示した。現在ライバルがいる生徒は、165 名と半数に満たなかった。しかし、ライバルが存在した生徒 (60 名) をあわせると、半数以上の生徒はライバルを持ったことがあった。また、ライバルとして認知されている生徒は、ほぼ同性同学年であった。

本人の成績と、ライバルがいる生徒についてはライバルの成績、ライバルがいない生徒には友人の成績について回答を求めた。それぞれの人数について FIGURE 2, 3 に示した。そして、ライバル/友人と生徒との成績の差を求め FIGURE 4 に示した。また、本人の成績、ラ

学習におけるライバルの人物像についての基礎的検討

TABLE 6 ライバルの有無 N = 393

	ライバルがいる	ライバルがない	以前はいたが現在はいない
男子	120	91	31
女子	45	77	29

TABLE 7 ライバルの性別 N = 165

	ライバル	
	男子	女子
生徒		
男子	115	5
女子	8	37

TABLE 8 ライバルの学年 N = 105

	1年生	2年生	3年生	その他
男子	0	119	1	0
女子	0	44	0	1

「その他」としてあげられた関係は自分自身であった。

ライバル/友人の成績、成績差、仲の良さのそれぞれに対してライバルの有無によりt-検定を実施した (TABLE 9)。結果、ライバルが存在する生徒の方が、ライバルが存在しない生徒よりも成績が上であると認知していることが示された。ライバルとして選択された生徒と友人として選択された生徒については、ライバルとして選択された生徒の方が成績が上であることが示された。成績差に関して有意差は認められなかった。しかし、成績差の分散に対してF検定を行なったところ、有意差 ($F(218, 163) = 1.96, p < .000$) が認められ、友人との成績差の方が、分散が大きいことが示された。また、仲の良さに関しても有意差は認められなかった。

成績についての分析の結果、ライバルがいる生徒の方が、ライバルのいない生徒よりも成績が上であり、ライバルと友人の比較においても、ライバルの方が成績が上であった。ライバルが存在する生徒の方が、学習に対する関心が高いと考えられるので、それだけ熱心に学習活動を行なっていることの現われであろう。また、成績差の分散に有意差が検出されたことは、ライバルと本人の成績にはそれほど大きな隔たりがないということが考えられる。加えて、ライバルがいる生徒とライバルとの成績の相関は強い正の相関 ($r = .53, p < .0001$) を示したのに対し、ライバルがいない生徒と友人との成績の相関は有意傾向の相関 ($r = .13, p < .06$) を示したに過ぎなかつ

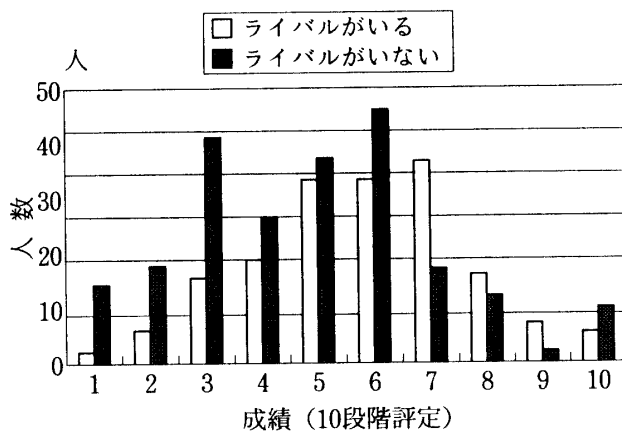


FIGURE 2 本人の成績の自己認知

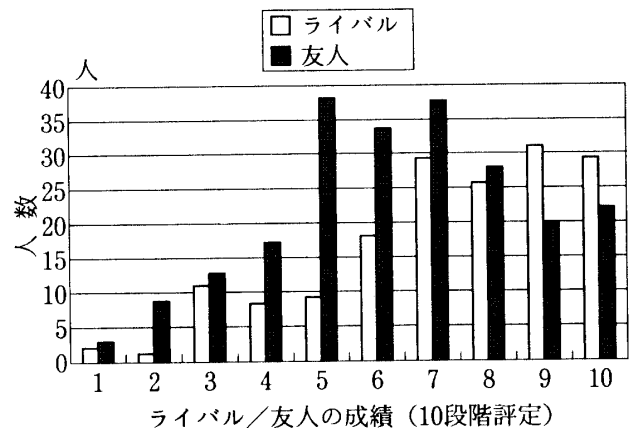


FIGURE 3 ライバル/友人の成績

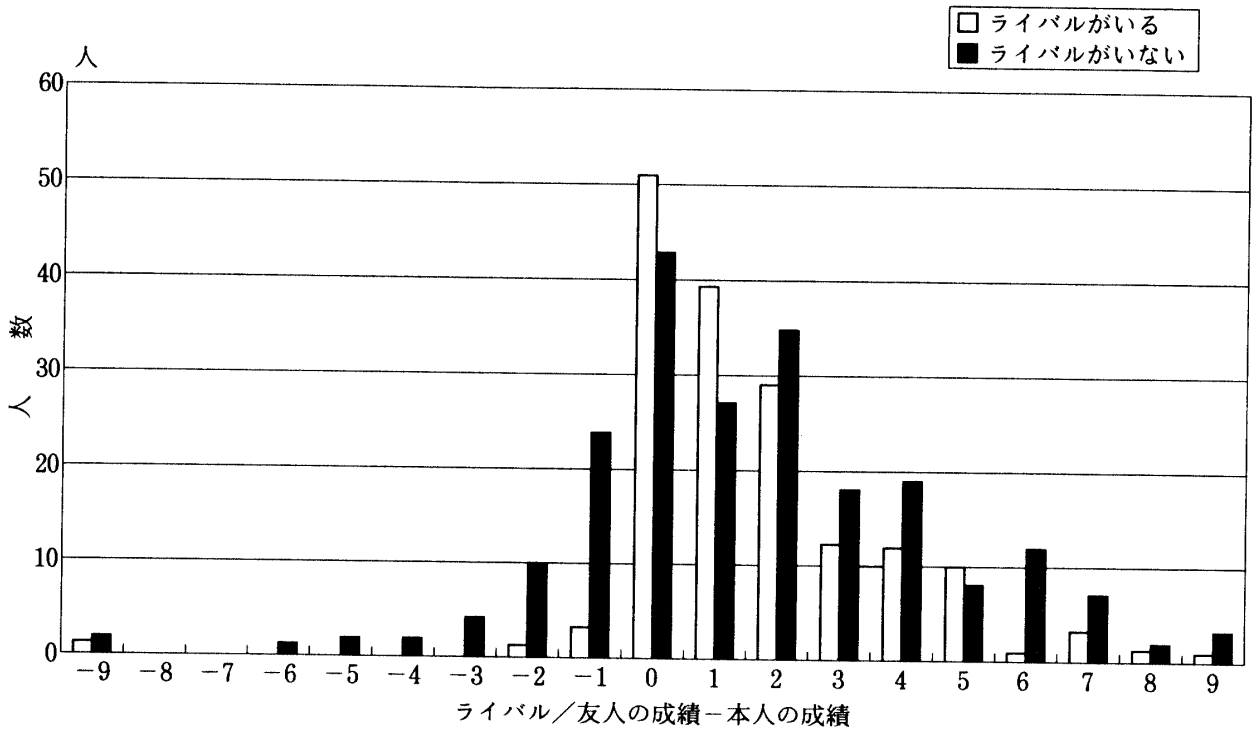


FIGURE 4 ライバル/友人との成績差

TABLE 9 本人とライバル/友人の成績, 仲の良さ

	ライバル存在群	ライバル不在群	t-値
本人の成績	5.75 (2.06)	4.80 (2.22)	4.31 ***
ライバル/友人の成績	7.33 (2.20)	6.36 (2.23)	4.25 ***
本人とライバル/友人の成績の差	1.59 (2.08)	1.52 (2.92)	.28
仲の良さ	13.90 (3.96)	13.86 (3.55)	.12

*** $p < .001$

TABLE 10 競争の内容の記述の分類

分 類	記述数
(1) 運動 (例: スポーツ, 体育, 野球, 水泳)	21
(2) 部活動	20
(3) 趣味, 遊び (例: ゲーム, カラオケ, 音楽)	17
(4) 容姿, ファッション (例: 服, 背の高さ, おしゃれ)	11
(5) 自己の性質, 洗練度 (例: 思想, 生活態度, 品行方正)	9
(6) 恋愛	4
(7) 生活の充実度 (例: 人生の生き方, 日常生活)	3
(8) 対人関係 (例: 人との接し方)	2
(9) ユーモア (例: ギャグセンス)	2
(10) 全般	2
合 計	91

学習におけるライバルの人物像についての基礎的検討

た。友人選択においては成績はそれ程重視されないが、ライバル選択においては相手の成績を考慮に入れるということを示している。もしくは、お互いに競って、または相手を目標として学習活動を行なっているので、結果的にその学力に関連ができたことを示しているとも考えられる。

勉強以外における競争の内容の記述があったのは165名中69名であった。競争の内容について分類を行なったところ、7種類の分類が得られた。この分類に対して心理学を専攻している大学院生2名によって妥当性が検討され、一部修正が加えられた結果、分類は10種類となった。得られた分類の内容と記述数はTABLE 10に示した。競争の内容を記述した生徒の半数が、部活または運動を勉強以外での競争の内容として記述していた。また記述が見られたのは男子に多かった。

記述が多く見られた、部活動・運動などの課外活動、音楽・ゲームなどの趣味・遊びは、日常生活において交流の深い他者と行なわれる内容である。交流が深ければ、それだけ親密な関係になる可能性が高い。このことから、日常的に競いあっている他者と、学習活動においても競争を行なっているといえよう。しかし、学習活動以外での競争について記述したのは、ライバルがいる生徒の半数にも満たなかった。確かに、競争の内容を学習のみとした生徒の方が多かったが、学習だけでしかつながらないことを指すわけではなく、学習場面では競争するけれども、それ以外の場面では良き友人である、と考えた

方が良いのではないだろうか。これは、友人とライバルに対する、「仲の良さ」に有意差が見られなかったことから支持されるだろう。

また、ライバルとして認知し始めた時期について、記述があったのは165名中158名であった。年号での記述は学年に換算し、夏、秋の季節の記述は夏を7月に、秋を10月に換算して集計した。集計結果はFIGURE 5に示した。最も多くの生徒がライバルとして相手を意識し始めた時期は、高校2年の4月であり、以下、高校1年の4月、高校2年の9月の順であった。相手をライバルとして意識し始めた時期について、小学校1年生からというものもあればつい最近というものまで幅広い時期が記述された。その中で、多くの生徒がライバル認知を持つようになったと記述したのは、高校2年の4月であった。高校生活にも慣れ、周囲の生徒との親密度が増す時期である。さらに、受験を意識するようになり、学習への関心が高くなる時期でもある。2年生になってからのライバル認知が急に増えていることを考慮に入れると、学習に対する関心がさらに高くなり、級友との関係もより親密になる3年生に対して、この調査を行なっていた場合、ライバルがいる生徒はさらに増えるのではないかと予測される。

FIGURE 5より、4月、9月という新学期にライバル認知が生じる生徒の多いことがうかがえる。これは、新学期になり、周囲との社会的比較の結果に変化が生じたためであろう。それまで、安定した比較が行なわれて

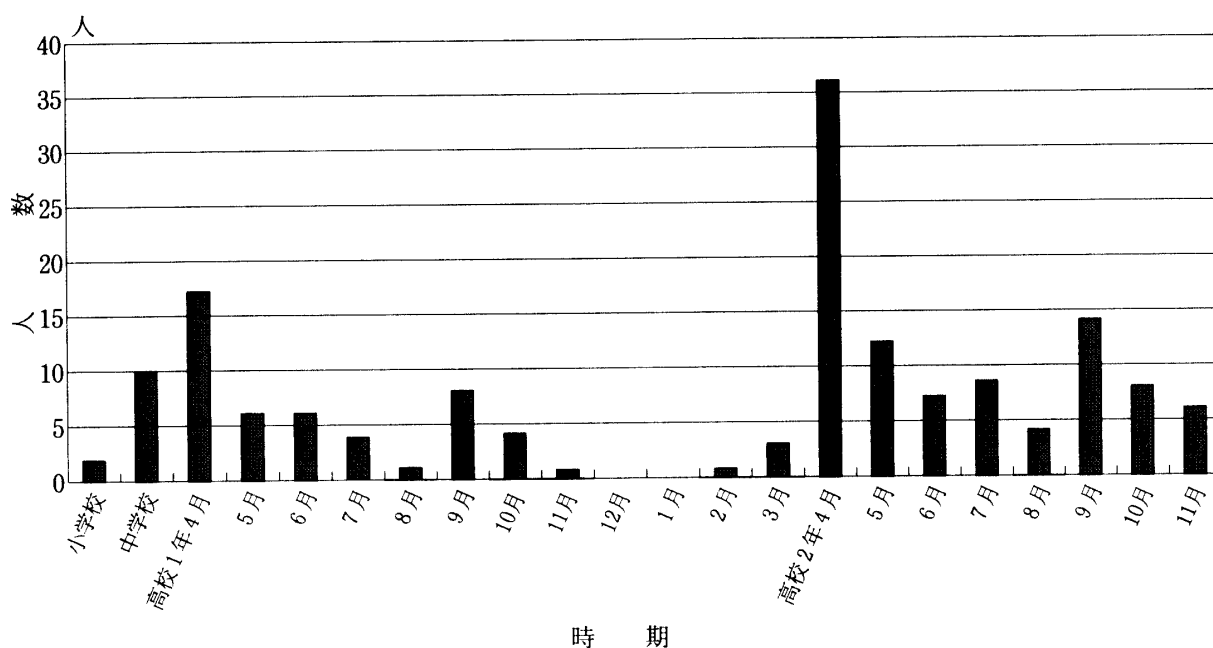


FIGURE 5 ライバルとして認知し始めた時期

いたのが、新学期になり、比較の対象自体が変わったり、比較の対象の能力的な変化を認知したりした結果、以前と同様の比較が行なえなくなってしまうためと考えられる。その変化が、生徒が抱く、比較の結果に対する感情に作用するのであろう。より強く作用した結果、相手をライバルとして認知するようになったととらえられるのではないだろうか。

総合考察

他人と競争してまで勉強するということは、競争に価値を持っている、あるいは勉強で他人よりも上に立つことに意味を持つ、と生徒自身が考えていることを意味するであろう。競争や学習に価値をおいている生徒は、より良い成績をとることに動機づけられ努力している。確かにライバルを持つ生徒は、成績においてライバルを持たない生徒よりもその得点は高い値を示した。しかし、得点が高いからといってライバルを持つとは限らない。ライバルを持って勉強していることは、学習に対する意識が高いことを示す証拠にはなり得るが、学習に対する意識が高いからといって、必ずしもライバルを持つことの証拠とはなり得ないからである。

室山(1995)、太田(1996)は、それぞれ生徒とライバルの関係の分類を行なった。室山の分類では、「課題中心関係」、「敵対関係」、「仲間関係」、「親友関係」の4類型に、太田の分類では、「親友関係」、「話をするだけの関係」、「友人関係」、「グループの仲間関係」の4類型にそれぞれライバルを分類した。これらの分類において、ライバルとの関係が非好意的な関係であるとされた関係は「敵対関係」だけであり、室山の分類において「敵対関係」に分類されたライバルが最も少なかった。太田の分類においては、ほとんどの生徒が「親友関係」に集中していた。本研究での結果において、「仲の良さ」ではライバルの有無による有意差は見られなかったことから、これらの結果を支持しているといえる。

「仲の良さ」の結果より、ライバルを持つ生徒は、ライバルとの関係は友好的であり、ライバルとして相手を認知することにより、対人認知がネガティブなものに変容するとは考えていない、と推測される。また、ライバルとの関係が友好的であっても、ライバルに対する競争意識はライバルを持たない生徒が想像しているよりも強く存在しており、ライバルが課題を媒介とした競争相手であることを示唆している。そして、ライバルが存在することによる自分の学習動機づけや学習態度への影響についても、肯定的にとらえていると考えられる。ライバルがいない生徒と比較した場合、ライバルと認知できる対象が存在している生徒の方が、「ライバル」という対

人関係について、より肯定的にとらえることができていると考えられる。

本研究では、ライバルとの関係を“課題を媒介とした競争関係”と定義している。一般に競争後の課題に対する内発的動機づけは、競争に勝った方は高まり、負けた方は低下することが示されている(Reeve & Deci, 1996; Reeve, Olson, & Cole, 1987)。競争に勝った方は、課題に対して好ましい認知を形成し、競争や課題を楽しめたと判断したのであろう。これは、競争に勝つことで自尊心は高められ、逆に競争に負けることで自尊心は低められるという指摘がなされている(Meeker, 1990; Tasser & Moore, 1989)ことから明らかである。しかし、ライバル関係は一時的なものではなく継続的なものである。内発的動機づけが低下したとしても競争をやめるわけではない。これは、相手に負けて悔しいであるとか相手に負けたくないといったライバル意識の存在が、競争に勝つことで高められた自尊心の維持、負けることで低められた自尊心の回復への原動力となっているためであろう。

室山・堀野(1991)は、望ましい競争の姿として、競いあうことを楽しみながら課題に取り組み、相手との友好的な関係を形成していくことをあげている。加えて、教育場面においても競争を否定するのではなく、できるだけ生徒の対等性が保たれる条件を導入することが重要であると指摘している。この望ましい競争の姿というのが、学習におけるライバルを考える上で重要になると考えられる。相手に対するライバル意識が存在するにしても、それがすぐに相手への否定的な感情へと結びつくわけではなく、相手に対する興味を増加させる役割を担っているのではないだろうか。事実、本研究の結果から、ライバルとの関係は友好的であること、そしてライバル意識は存在するにしてもライバル関係はそれ程強く意識していないことが明らかにされた。生徒自身、競争心やライバル心をむき出しにしたようなライバル関係は築いていないのである。

引用文献

- Deutsch, M. 1993 Educating for a peaceful world. *American Psychologist*, 48, 510-517.
- Festinger, L. 1954 A theory of social comparison processes. *Human Relations*, 7, 117-140.
- France-Kaatrude, A. & Smith, W.P. 1985 Social comparison, task motivation, and the development of self-evaluative standards in

- children. *Developmental Psychology*, 21, 1080-1089.
- Frey, K.S. & Ruble, D.N. 1985 What children say when the teacher is not around: Conflicting goals in social comparison and performance assessment in the classroom. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 550-562.
- Latané, B. 1966 Studies in social comparison: Introduction and overview. *Journal of Experimental Psychology, Supplement 1*, 1-5.
- Meeker, B.F. 1990 Cooperation, competition, and self-esteem: Aspects of winning and losing. *Human Relations*, 43, 205-219.
- 室山晴美 1995 ライバルとして記述される対人関係に関する一考察 心理学研究, 65, 454-462.
- 室山晴美・堀野 緑 1991 競争場面における敗北者の課題認知と対人認知—負け方と勝者からのフィードバックの効果— 教育心理学研究, 39, 298-307.
- 太田伸幸 1995 学習意欲形成に及ぼす友人の影響 名古屋大学教育学部教育心理学実験演習Ⅲ提出論文(未公刊)
- 太田伸幸 1996 競争心が生徒の学習動機づけに与える影響について—ライバルの存在がもたらす動機づけ効果— 名古屋大学教育学部卒業論文(未公刊)
- Reeve, J. & Deci, E.L. 1996 Elements of the competitive situation that affect intrinsic motivation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 22, 24-33.
- Reeve, J., Olson, B.C., & Cole, S.G. 1987 Intrinsic motivation in competition: The intervening role of four individual differences following objective competence information. *Journal of Research in Personality*, 21, 148-170.
- 高田利武 1981 社会的比較過程理論における類似性仮説—その批判的検討(1)— 群馬大学教育学部紀要(人文・社会科学編), 31, 275-290.
- Tesser, A. & Moore, J. 1990 Independent threats and self-evaluation maintenance processes. *The Journal of Social Psychology*, 130, 677-689.
- 吉田道雄・山下一郎 1987 児童・生徒の学習意欲に影響を及ぼす要因と現職教師の認知教育心理学研究, 35, 309-317.

(1999年9月16日 受稿)

ABSTRACT

Rival Image on Learning Situation: A Fundamental Study

Nobuyuki OTA

The purpose of this study was to examine the characteristics of 'rival' by comparing rival images of students who had a rival and who did not, and by contrasting a rival and a friend one perceived. In study 1, rival image was investigated on 295 high school students (105 students had a rival and 190 did not). When students mutually recognized that they were rivals, their performances were similar to each other. On the other hand, students who one-sidedly recognized someone as a rival perceived that the performance of the rival was better than that of themselves. Regarding the relationship with rivals, students with a rival assumed greater intimacy than those who did not have any rivals imagined. In study 2, rival recognition of students with a rival and friend recognition of students without a rival were investigated on 393 high school students (165 with a rival, 228 without a rival). The analysis of performance showed; (1) students who had a rival had better performances than those who did not; (2) students perceived as a rival had better performances than those perceived as a friend; (3) the performance gap between a rival or a friend and the subject student had no significant differences between those who had a rival and those who did not. However, the variance of the performance gap was significantly greater between the subject student and a friend than between the subject student and a rival. In conclusion, it should be noted that students who had a rival had more affirmative images toward a rival than the others.

keywords: rival, rival image, rival cognition, competition